

---

# BACK

松本 和

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BACK

### 【ZPDF】

Z2520B

### 【作者名】

松本 和

### 【あらすじ】

酸性雨が降り続ける乱れた世界。俺には行かなくてはならないところがある。でも俺はまだここを動けずにはいる。

## プロローグ

ロアと会ったのは、ほんの一週間前だ。ロアは酸性雨が降る中、身を守るもの何も身に付けていなかつた俺を自分の家に来るよう促た。

…出会ったときにはもう感じていたさ。ロアは俺たちとは何かが違つてゐつてこと。

ロアは俺を家に連れてきてします最初に「シャワーでも浴びてきなよ。」と言つた。

俺は言われた通りにシャワーを浴びることにした。

シャワーを浴びながら考えた。何であの人は俺を助けてくれたんだろう。俺はもう一週間もの間、住むところを探して彷徨つていた。その間何人もの人に会つたが誰一人俺に話し掛ける人はいなかつた。

どうせ死ぬからだ。酸性雨の降る中何も身を守るものを身に付けてゐるなんて、尋常じゃないからだ。…なのになんであの人は…。いくら考えたところで俺が本当の理由を見つけることは出来ないんだろうな…。そう思つたから考えるのをやめた。

俺は水の使いすぎは悪いと思い早々にシャワーを止めお風呂場から出た。

「着替えだけど…」

ロアは声もかけずに脱衣所…らしきといひに入つてきた。そりやお前の家だし俺は男だけどさあ…？

とつさに体を拭いていたタオルで体を覆い、しゃがみこんだ俺をロアは驚いた目で見ていた。

「…悪かった。次からは声をかけるよ。」

ほほ笑みながら言われた言葉も、その顔も作り物のようだつた。鳥肌がたつた。「いや…俺こそ悪かつたよ。…着替え、貸してくれるなら…貸してほしいな。」

鳥肌がたつたまま言つたその言葉は自分でもはつきりとわかるほどに震えていて…そんな俺をロアがどう思つたのかはわからない。

ロアの服を着て台所…らしきところに行つた。ロアは暖かいココアをいれてくれていた。

…この家は不思議だ。…というか変だ。どこもかしこも本だらけで、自分がいる場所が台所なのかさえわからぬくらいに本にうめつくされている。

置いてある本がどういう本なのか題名を見よつとしたところへ、ロアが湯気をたてるココア持つてきて俺の前に置いた。

そして俺に椅子を差出し座るよつて言つた。自分は積み重ねた本の上に座つた。

「ありがと。」

さつきのこともあつて、俺は正直早くロアの家を出でいきたいと思つていた。

ロアはまるで自分のことを警戒している猫にでも言つよつて言つた。

「さつきも言つたけど…ずっとこの家に居てもいいんだよ。」

…わけわかんないよ。俺は赤の他人だぜ？今の時代…親が生き残るために自分の子供を殺すような、こんな時代に…誰だつて自分が生き残ることで精一杯なこの時代に…一体何なんだよ。

「僕は一人暮しから誰か一緒に住む人探してたんだ。」

それが本心なのかは疑わしかつた。だいたいロアくらいの若い年で一人で暮らしていられるつていうのがすでに普通じゃないんだよ！

俺はロアが納得のいくような言葉をひとつと選びながら答えた。

「……俺は、行くべきところがあるから……感謝はしてるよ。……でも、すぐにはまた行かなくちゃいけない。」

ロアはしばらく黙つたままだった。俺はすぐこの家の家を出て行ける。と安堵した。

でも、ロアがそんなに簡単に俺を帰すはずがなかつたんだ。

「そつか……でも……とつあえず、今日はソリソリ休んでこくとこよ。寝るところもあるし。」

ロアの笑顔を見て、また鳥肌がたつた。断り切ることが出来ず、こくとこ俺は嫌々ロアの家に泊まることになった。

それから一週間、俺はロアの家から出せもらつていない。

ロアは俺たちとは何かが違うんだ。俺はそんなロアが恐い。一週間たつた今でもロアとは打ち解けられずにいる。

俺がロアの家に来てから一週間。一週間一緒にいてロアについてわかつたこと。

まず、ロアと俺は同じ年で17歳だ。ロアは家族はもちろんのこと親戚もいない。俺と一緒に。

それから、ロアは家から歩いて5分くらいのところにある飲み屋を経営している。一人で。といっても今は俺も一緒に。

酸性雨がいつも降っていて空だっていつも淀んでる……それが今俺たちのすんでいる環境だ。草や花や木もめったに見られないし、上手に育てないと家畜もすぐに死んでしまう。

そんな秩序が悪い環境だから、犯罪なんて日常茶飯事だ。自分の身は自分で守らなければ生きていけない。

ロアの飲み屋はそんな中でも繁盛している。理由はよくわからないけど。だからロアは一人で暮らしていられるんだ。

普通の俺たちくらいのガキが一人で暮らしていたらすぐに餓死でしんでいるさ。犯罪に手をだすってんなら話は別だけど。

ロアは人を引き付ける何かをもつてているんだ。俺にはそれが恐くてならないけど。

目が笑っていないほほ笑みや有無を言わせない問い合わせ方は誰にも負けないだろう。……強引なんだ。自分勝手とはちょっと違うかな。

一週間一緒にいてわかつたことなんて本当に少ない。まだまだわか

らないことだらけだ。それに俺はまだロアへの警戒心をといてない。それはロアもわかつている。

それでもロアは俺に話しかけてくるし、何度も出ていくと言つても了承してくれない。

一回夜逃げようとしたけど、あつせりと捕まつた。ロアは只者じやない。冗談じやなくて、普通の人……俺たちとはどこかが違う。

俺が最初に感じたものは確信に変わつていた。

家で夕飯を食べているときに、もう何度もした質問をした。

「もうそろそろ行きたいんだけど、いいよな。」何がいいのかなんてロアにはわかつている。

「外に出れば君は死んじやうよ。」いつものロアの答えだ。でも、ここで諦めたらもう一度とこを出れないじやないか。

「それでも俺には行かなくちゃいけないところがあるんだよ……」俺はロアの目を見ながら言つた。

「その行きたいとこでどこなんだよ。この町から隣の町までは歩いて丸7日はかかる。その間とまれる宿なんて一つもないんだよ。死んじやうよ。」

ロアの意見は最もだつた。

それでも俺は早く行かなくちゃいけないんだ。

「俺はここにくるまで2週間歩き続けたんだ。大丈夫さ。」それを聞いてロアは少しの間考え込んでいた。

しばらくして、ロアは落ち着いた様子で俺に話した。

「あつちから來たから……僕の記憶が正しければ君はエルタ村から來たんだろ？。」

「もうだけど……それがなんだよ。」俺は下を向きながら答えた。次にロアがなんていうかが恐かった。

俺のその言葉を聞いて、ロアは大きくため息をついた。そしてさりと言つた。「それならなおさら行かせられないよ。……一生ここからは出せない。」

思わず顔をあげたら、ロアと田があつた。まるで獣に見つめられているようで居心地が悪い。

「だからー……なんでだよ。」もつ俺の負けだつてわかつていてもその言つしかなかつた。やめせない。

「君……ひどい怪我をしていろでしょう。……はじめて会ったときから気づいていたけど。

話してくれないし、秘密にしておきたかったんだと思つて。」

確かに俺はロアに怪我をしていることを言つていない。……じゃあなんで知つてんだ！？初めて会つたときには気付いてたって……俺は怪我してるとこは全部服で覆つておいたのに。

何がなんだかわからなくて、冷や汗がとぎれることなく体中からあふれてくる。

「だから、怪我なんとしてるのに酸性剤の中歩こひきやダメだよ。……この前もアレが君の限界だつたでしょ。」

すべて見透かされている。ロアには隠し事なんてできないんだ。……恐い。ロアは俺のことをどこまで知つているんだ？……さきは俺の住んでいた村をあてた。……もしかして、ロイツ！

「確実に死ぬのに……君は行くの？怪我は悪化して、化膿して、空腹に耐えて、必死に歩き続けて。」

次の言葉を聞くのが恐い。ロイツは知つてはいるんだ！俺は思わず両耳をふさごうつむいた。聞きたくなかった。

「そこまでする価値があるのかい？……君の村の人々は……。」ロアの顔は見えない。……でも笑つていてる気がする。

やつぱり知っていた。わからせるような仕草をしたつもりはない。なんだコイツは。

「ねえ。聞いてる？」

ロアが俺の肩に手を置いた。驚くほどに冷たい手だった。ふいにロアの手を払い除けた。

触れられるのがイヤだと感じた。

「うわせえみ。…お前に関係、ねえっつうの。」

俺が必死に言つたことだえ、ロアひとつひとつでもいいことなんだ。

「関係あるよ。一緒に住んでるじゃないか。」今度はロアの顔が見えていた。確かに、“笑つていた”。

「強制じやん。」やさぐれていると言つていいくの言葉を聞いて、ロアは再びため息をついた。

そして俺から少し離れると面倒がりながり言つた。

「じゃあ、君がなんで死ぬ思いをしてまでここに来たのかをもつと詳しく教えてよ。

わざと僕が言つたことなんて全部勘なんだからね。」

ウソッケ。俺は心の中で呟いた。ついでに、現実ではけなせない分、心の中でおもいつきりけなしてやつた！

つと…それどころじゃない！条件もなく自分の…自分の村の秘密を

話すなんて絶対にゴメンだ！

「話したら、行かせてくれるのか？」とロアに聞いてみた。

「……まあね。」至極曖昧な返答だ。しかし話さなかつたらこのまま何にも変わらない。それなら話す他に道はないぞ。

俺は覚悟をきめた。

「ロアの言つとおり、俺はエルタ村から来たんだ。

お前がいつのエルタ村を知つているのか知らないが……今エルタ村は村全体がはやり病にやられてるんだよ。

村のほとんどの奴がな。んで、その病気に効く薬がエルタ村にはないんだ。

どこにあるか……これはたぶんの話だけど、ここは隣村のアルス村にあるつて聞いている。

さつきもいつたけど、村のほとんどの奴が病気にかかってるから薬をとりに行く奴も限られてたんだよな。  
そこでだ。若いつてこともあって俺がその薬をとりに行く役に選ばれたんだ。

今のところその病気で死んだ奴はいなかつたから、いつまでとかはないけど急がないと多くの村人が死ぬかもしれないんだ。

……よし！ロア！これでわかつただろ？俺は急いでいるんだ。だから早く行かせてくれ！……な？」

長々と話したせいで口の中が乾いていた。俺はそばにあつた水を口に含んだ。ゆっくりと冷たい水が喉を通りいくのがわかる。少しの間だが、安心した。

俺が水を飲んでいる間、ロアは顎に手をあてて俯き、何やら真剣な

表情をしていた。それを見て俺は、次にはせせらげるロアの言葉が、俺を解放する…というものであることを心から願つた。

「…君、親…つていうか親戚でもいいけど、こりの?」ロアは顔をあげるとすぐに聞いてきた。

なんでいきなりその質問?と思つたけれど正直そこは聞かれたくないことだつた。しかし、ここで答へなければ事態は悪化しそうだ。それに、ウソをついてもきっとばれる。

「いないけど。…」それが?と言つ聞にロアが強引に口を挟んだ。

「じゃあ、君は村の人たちに半強制的に今回の役を引き受けさせられたんでしょう?…村を追い出された、に近いようなやり方で。」

「つ…」俺の話のどこからそんなところまでよみとれるんだ?  
…また追い詰められている。気がする。俺は狭い空間の中にいて、ただでさえ窮屈なのにロアはどんどんと俺を端の方に追いやつてしまいには…俺は。

「そして、その怪我。今の君の話に出てこなかつたけど。」

ドキリとした。俺が最も触れて欲しくなかつたところだ。きっとロアはもうわかつてゐるんだ。

「僕の考えを話していいかな?」ロアの問い掛けに、俺は答へなかつた。ロアはそれを肯定としてとらえたようだ。勝手に話し始めた。

「君は両親がいない…つまり孤児だね。仕方なく村のどこかの家に

引き取られた。…君の性格だと、家や村の人には可愛がられていたんだろうね。

でも、村では病氣がはやつた。それのせい…かな？村人がいきなり君にきつくあたり始めた。

君はそんな仕打ちをうけても自分を可愛がってくれていた村人のことが好きだった。…でもさすがの君も薬をとつてくるというのには抵抗があった。

まあ当たり前のことだよね。だから村人にはそう伝えた。…そしたら、突然暴力をふるわれたんでしょ？一通りやり終えると村人は旅の道具だけ渡して、君を村から追い出した。

……つてところかな？どう？あつてたかな？

あつてる、あつてないなんていうレベルじゃない。そのまんまだ。まるで全部見ていたかのようだった。…というか見てたのか？…コイツならありえる。

また返答しないでいるとロアは満足そうに微笑んだ。

「そんな人たちのところに戻る必要はないよ。」

「……に僕と一緒にいればいいんだよ。……一生。」  
ロアは本気で言っていた。笑いながらの言葉でも、ナイフを押しつけられているような威圧感があった。

「い……いやだ！俺は……帰るんだから……薬を持って、あの村に戻るんだ！」

あの村には俺の育ての親がいる。可愛がってくれていた近所の人がある。友達もいるし先生もいる。

いくら暴力をふるわれたからって、それは変わらない。あの村に戻りたい。これは偽りなんかじゃないんだ。

「君がわかつてくれるまで何回でも重つけど、君は村までたどりつけないよ。  
途中で死んでしまう。」

俺がここにのこると言わないからか、（たぶんそうだ）さすがのロアもだんだんとイライラしてきたようだ。

「……戻つたつて、誰も君を歓迎しないんじゃないかな？追い出されたんだよ？……ケガをしながらだし、途中で死ぬ確率の方が高かつたんだから……村の人たちは君が死んでも何とも思わないよ。」

「お前に！……何がわかるんだよ！？」別にロアを殴つてやうつとか、そんなことを考えたわけではなくて……気付いたらそういういた。自分をノントロールできな」。

「セツキツからベラベラと……お前は知つてゐるみたいと思つても、何にもわかつちゃいないよ！」

わかつてたまるか！俺がどんだけあの村好きかも……どんだけあの人たち好きかも……どんだけ村に戻りたいかも……お前は何もかもわかつてないんだ！」

わかつたように言つたよ！お前にはわからなはずだ！？あの人たちにだつて理由があつたんだよ！？」

完全に抑えがきかない。本当は、ロアがあつてゐてわかつてゐるんだ。ずっとわかつてた。……酸性雨の中を歩いてるときにはそのことをしか考えられなかつた。

それでも……抑えずにはいられなかつた。……俺はどこかで、それでも……と思つていたんだ。信じていてほしい自分がいた。

くそつ！なんでこんなことになるんだよ！……俺は田を力強くこすつた。そうしなければ、涙があふれてしまつからだ。あわてて俺はロアに背を向けた。

俺におもいきり殴られたロアはしばらくだまつて座っていた。俺に殴られて床に倒れこんだ状態から体を起こしただけの格好だ。

「…やりすぎたかも。俺がロアに謝らうか…と迷いはじめたときやつとロアが口を開いた。

「ねえ。ちょっとこっち見てよ。」まったく怒っているという感じはなかつた。だから俺は安心しきつていた。とりあえず謝るか…俺も悪かつた。

振り向くか振り向かないか。というよりも、ロアが俺の頬を殴れるようになつた瞬間だ。俺の頬に勢い良くロアのごぶしがぶちあつた。

油断しきつっていたこともあつて、俺はロアよりも遠くに吹っ飛んだ。  
…その結果、本でできたタワーがぶつかつてしまつた。

その衝撃で本の雪崩がおきて、俺はたちまち本に埋もれてしまつた。殴られたのも痛かつたが、この本もかなり痛かつた。

俺は両手で必死に本をどかした。どうやらロアは手伝ってくれていないらしく、そのおかげで俺は、思つていたより長い間本に埋もれていなければならなかつた。



「僕が何にもわかつていなーって?……バカ言つなよ。僕の方がわかるくらこや。」

やつと本をじかして立ち上がりつとしたときロロアが言った。

立ちながら

「どうこいとだよ。」と聞いた。

「……どうして僕がここまで君に執着してゐるかわかる?」

突然のことにより俺は一瞬言葉を失つた。そうだ。ここまでの態度はわからないことばかりた。

偶然出会つた俺をどうしてここまで。

「わからないようだから教えてあげるよ。全部。……聞いたら君はシヨックを受けるかもしないけどね。」

試すよーな口調にイラッとした。

「なんだよ。」

「さつき僕は君は村から追い出されたつて言つたでしょ?それはうそじやないよ。……どうしてそれを僕が知つてゐるかだ。

君が僕に会つたのは偶然ではなくて必然なんだよ。  
どういふことだかわかる？」

バカにされている氣しかしないが、俺は今お前が言いたいことわかる

「仕組まれてたつてことなのか？」

「…よくできました。じゃあその首謀者は誰だと思う？」

いちいちむかつくなあ。

「お前じやねえの？」これまでも態度からするに絶対にこいつだ！

ロアは一コリと笑つた。

「残念。僕じやないんだ。言つただろう？村の人たちは君を追い出  
したかつたんだよ？」

「村の奴があ前に頼んだつていうのかよ！？」

いくら俺を追い出したくなつたからつて…そんなことまですんのか  
よ？

「正解。村の人はどうしても君を追い出したかつたんだ。多大なお  
金を注ぎ込んで僕に連絡をよこしたよ。

僕はちょっとだけ、有名だからね。君と歳も近いし。」

自分がそんなに村のみんなに嫌われているとは。今回のことはみんなを信じていたのに……。泣きたくないのに涙が溢れてくれる。泣きたくないと思つぱどいたくさん溢れる。

「なんだよ。……そこまで、して。俺を追い出したかったのかよ。」

「……君の悪いくせだ。」ロアは軽くため息を吐きながら言った。

「まだ僕はなんで村の人があの君を追い出しがつたか、言つてないだ  
う。」

「俺を邪魔だと思ったからだろ？」自分で言つてから悲しくなつた。

「早とちりだね。……わざわざつておくれけど、村の人はみんな君のこ  
とが大好きなんだよ。」

ロアのその言葉で俺はよくわからなくなつた。

そんな俺を見て、ロアは2人分の「ロア」を用意しながら呟いた。

「君は幸せ者だよ。僕なんかよりもずっとね。」

ロアが何を言いたいのか全然わからない。…どうよりもわからせようと思つてんのか？まわりくどい説明ばかりで、俺の頭の中はパニック状態だ。

「…どうこうことだよ。」続きを話そうとしないロアに早く話すよう促す。

「確かに村人たちは君を追い出したかったんだ。…それは、君が本当に村のことも村人のことも好きだって知っていたからだ。

： 本当は村人たちは君を助けたかったんだ。  
君の村でまだ病気にかかっていなくて、若い年だったのは君くらいしかいなかつたんだよね？」

俺は余計にパニックに陥つていた。今度はロアが休むことなく、話を進めたからだ。

「そりなんだよね？」

もう一度聞かれて、俺はようやく答えられた。確かに俺くらい若くて病気にかかっていなかつたのはたぶん俺だけだった。ほかにもいたかもしれないが、俺が一番健康だつただろ？

「そりなんだ。村人が君を追い出した理由は。君はまだ病気にかかっていなかつたし、なによりも若かった。

そんな君もあるまま村にいれば絶対に病気がうつつただろうね。…  
それを村人たちはふせぎたかつたんだ。

まだ長い人生がのこつていて、村のみんなを大好きな君に生きていてほしかつたんだ。…君がみんなを好きなように、みんなも君がすきだつたんだね。

でもただ村を追い出すだけでは死ぬ確立の方が断然高い。だから僕に頼み込んできたんだ。君の面倒をみてくれつてね。

あとは運まかせのトコもあつたね。君が一人でここまでこれなれば、すべては台無しになつていたんだからね。」

ロアは一気に…しかもさらつと説明をした。

俺にとつてはそうだつたんだあ！…よかつた！。嫌われてたんじゃないんだあ！…なんてさらつと受け入れられるような内容じやなかつたんだけど。

だから俺は、ロアから話されて、自分で十分その話を整理して…初めてロアが話してくれた内容が理解できた。

「つまり、みんなは俺のことが好きだから、俺を生かすために村を追い出したつてこと？」

俺は自分で整理して導きだしたこと…といつよりも簡単にわかることか…をあつてているか確認した。

「そういうことだね。」

ロアがさつきいれたココアを飲みながら、適当な雰囲気を少しづばかり漂わせて答える。

「じゃあ、俺が薬を頼まれたのも……暴力ふるわれたのも、うそで演技だつたつてこと?」

整理しながら疑問に思ったことを口にする。

「そういうことになるね。……ああ、いい忘れたけどその病気を治す薬……そんなの存在しないんだ。

でも勘違いはしないでね。村人たちのほとんどが病気にかかっているのはうそじゃないからね。」

ロアは俺が考えることなんてお見通しだつたよつだ。俺はがっかりして深いため息をついた。

別に俺はあの村で死んでもよかつた…むしろあの村で死にたかった。だから俺は自分が生きていらることよりもみんなと一緒にいられることの方がよっぽど幸せだった。

薬の話がうそだとわかつた今、俺はみんなを救うこともできなくなつてしまつたんだ。

「がっかりすことなんて何もないよ。君はここで病気にならうことなく、不自由なく暮らせるんだから。」ロアが言つ。今まで一番樂しそうに…。

俺はその言葉をつか、よくよく考えた。もうひとつの先のことについてだ。

そうしてひとつ結論に達した。きっとロアの話を聞いてから、俺の願いはひとつしかなかつたんだ。

「…ロア。俺は、それでもあの村に帰りたい。行かせてくれよ。…あの村で死ぬのは、俺にとっては本望だ。」

きつと声は震えていた。ロアが今までに散々断つてきたことだし、そう簡単にはいかないだろう。

ロアはココアが入っているカップをテーブルに置いて、俺に一步近づいた。

やばい…さつき殴られたこともあり、俺はとっさに腕で顔をガードして目をギュッと閉じていた。

…しばらくしても何の衝撃もない。俺がガードを解いた瞬間を狙つてこるのだろうか…。

目を開けてロアを見る。その頬はたえまなく溢れる涙でぬれていた。

俺は突然のことで状況がうまく飲み込めなかつた。

なんでこのタイミングでロアが泣くんだ！？

「……村に戻つて、どうすんだよ！戻つたら君のために辛い選択をした……村人たちが可哀想だと思わないのかよ！」

この家に来て、まだほんの少しだ。…ロアがここまで怒つて声を荒げる」となんて今まで一度もなかつた。

「村人たちのことも考へろよ！……君に生きていてほしいんだ。もし村に帰るなら、それはかなわないんだよ。」

またいつものロアに戻りつつあつた。…ロアがここまで必死になるなんて。

「どうか。ロアは俺よりも村人たちの気持ちがわかつてゐるんだ。俺のことを頼まれた張本人なんだから。

ロアのこと。俺はもつといやなやつだと思つてた。俺をこの家に閉じ込めて、出してくれなかつたからだ。……どこか恐いところがあつたからだ。

俺はロアのことを誤解していたんだ！ロアは俺のために、みんなの

ために涙を流してくれている。とてもこじやつじやないか。

そういえば、俺はロアのことをあんまり知りつとは思わなかつた。全然知らないんだ。

ロアが言つたことは正論だ。確かに、今村に帰つたらみんな悲しむだろう。怒るかもしれない。俺はみんなに愛されていた。……それだけで幸せだ。

俺はよつやく落ち着きを取り戻したロアのそばまで行つて、肩に触れた。

「わかつた。……俺。ここに残るよ。……よひじくな。」

## Hペローゲ

しばらくして、彼は眠った。泣き疲れたようだ。寝たことをじっかり確認する。本当に幸せそうに寝ていた。

僕は、村で唯一電話をかけられるところへいった。公衆電話のようなものだ。

そこから、エルタ村に電話をかける。エルタ村にも、一ヶ所だけ公衆電話のよつなものがあるのだ。

呼び出し音が数回なつてから、エルタ村の村長が電話に出た。僕からの電話を待っていたのかもしれない。

「ロアです。」と言つと、村長は黙り込んだ。  
僕は通話料が高いので、手つ取り早く終わらせるために、簡潔に話をする。

「彼、僕のところに残るそうです。…よかったですよ。意地でも村に帰りそuddたんで。

「これで契約は完了ですね。明日には薬が届くと思います。  
…彼には、あなたたちが彼を救うために村を追い出したと言つておきました。その方がいろいろと都合がよかつたんですね。

彼は、あなたたちに愛されているとわかつて…とても幸せそうでし

たよ。

涙を流して喜んでました。本当にあなたたちのことが大好きだったんでしょ。う。

まさか、自分が病気が治る薬と引き替えに僕に売られたなんて。夢にも思わないでしょ。う。

まあ……幸せですよね。結果的には、自分を犠牲にしてあなたたちを救つたことになるんですから。

彼にひとつはこれ以上ないほど幸せで……。せつと本望ですよ。

それから最後にもうひとつ。……安心していいですよ。彼が村に帰ることもなければ、あなたたちが生きていると知ることもないんですから。

彼はあなたたちにうられたんですから。僕がしつかり面倒をみますよ。……あなたたちの分も。

……彼は死ぬまですつと……僕と一緒にです。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2520b/>

---

BACK

2010年10月27日01時35分発行